

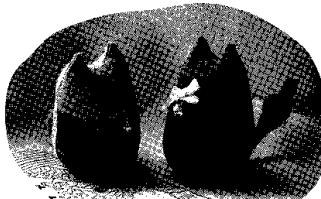
どこで

ちあきと
おみやげ
小物(?)たち

この粋な柄をふろしきとして使うだけではもつたないので、木の椅子に掛けてしまいました。厚いガラスのコップ(800円)にコップラウそく(350円)を入れると、ほんのりとした明かりがきれい。素敵な色・柄の着物用小道具、アンティークな器、高貴な香りのお線香など、なんだかいろいろ、使い方が工夫できそうですね。

風呂敷：くり原呉服店 大手門通63-7755
コップ：宇根屋 北国街道62-4692
コップラウそく：

会津屋 ゆう庵番街62-0155



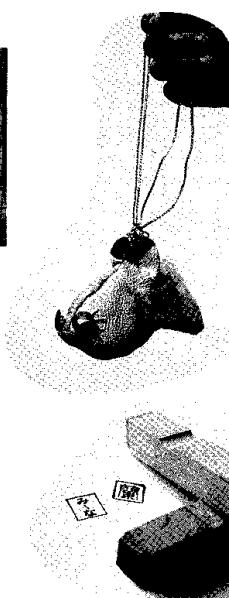
福を招く猫ちゃん人形(各700円)
は吉川呉服店で。同じく猫のお手玉や、てのひらに乗るような
お人形など、かわいらしい小物
がいろいろ。気さくで上品な店主・吉川愛子さんとのお話も楽し
い。

吉川呉服店

北国街道62-0073



長い歴史をもつ吉川呉服店の店内は、昔使われた道具類が並び、さながら小さな博物館のよう。色も褪せずに残る看板、そろばん、はかり、古い帳簿など。昭和時代以前につくられたものは、売り物ではないとのこと。「見せるだけ」という張り紙が愛子さんの奥座敷しさを感じさせる。



北国街道入口のハンコ屋さんの主・松岡成男さんは4代目。ハンコ各種や表札、名刺のほか、こんなオリジナルゴム印(500円)もつくってもらえます。

松栄堂印判店 北国街道62-3420

かともども、お店とお客様との関係だったはず。でもつて、商人は言うのです。「毎度おおきにー」。
さて、ここに並んだのは、市内商店街をウロウロ歩き回って探しめた品物。こんなお店にこんなモノ売っていたのか？ っていうメックモノの数々です。あなたがキヨロキヨロすれば、もっと楽しいモノがきっと見つかるはず！

買ったん？

このじる、長浜市内の商店街のそぞろ歩き楽しんでるのは、観光で来られたの方が多いくて、店先にも、おみやげ向きの商品が置かれるようになります。でも、ご心配なく。私たちが求めるふだんの暮らし用の商品もちゃんと置いてあるのです。

地元のお客さんあつての商店街。ローカルな会話を交わしながらの品物選び。オマケは、ちょっとした街の新しい情報。そんなコミュニケーション♪



わらじ(650円)とうちわ(280円)は、もともと蚕糸の道具を扱っていたという『みのや』。わらじは足場の悪い所を歩くのに便利。うちわは、柿洪の赤がきれいで丈夫そう。

みのや民造商店 北国街道62-5606



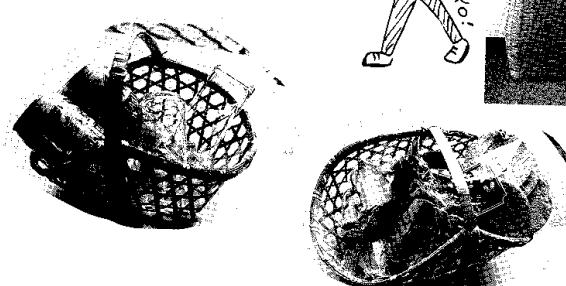
おばあちゃんの店『丸彦』で買ったモンペ(1,680円)。おばあちゃんでなくても、似合うでしょ？ ゆったりしていて、動きがラクチン。街で着る自信のない方はホームウェアとしてどうぞ。

丸彦呉服店 ながはま御坊表参道62-0372



これは看板ですが、アンティーク万年筆のコレクターはのぞいてみたい『マルエス堂』。先代福岡佐蔵さんのイニシャルから名付けたという店名。いまは菊子さん手づくりのバッグも並んでいます。

マルエス堂 ながはま御坊表参道62-8376



『竹夫人』(18,000円)という名のこれは、寝苦しい夏の夜、抱っこして寝ると暑さをやわらげてくれるというスグレモノ。かわいい持ち手付きの便利カゴ(3つで1,000円)と釣った魚を入れるピク用カゴ(950円)は、部屋のなかでつかってみました。

竹伊 北国街道西入る62-0666

湖北・長浜の

えびす
蛭子(恵比須)神図

森岡栄一



▲紙本墨画淡彩蛭子神図（山縣岐鳳）

今回の「みーな」のテーマは、「羽織け長浜の商店街」という内容のこと。雅びな編集子から「湖北の引き札シリーズ②長浜の引き札」でどうですかとのアドバイスを受けた。たしかに商店街と引き札はよくマッチしたグッドアイデアであるが、今回は商売の神さん恵比須さんについてふれることにして、引き札については稿を改めて述べてみたい。なお、恵比須さんの祭り「恵比須講」は、旧暦の十月二十日にも行われていたので、十一月発刊の本誌に、この題は即応すると思われる。

一 恵比須信仰

恵比須は、「恵比寿・恵美須・蛭子・夷・戎」

とも書き、七福神の一つ。エビスの名は、異邦人・辺境者の意味である「エミン・エビス」から派生しているともいわれる。招福の神となる以前に市神として登場するエビスの祀られた市は、山の幸・海の幸が集まる、したがって生活基盤の異なる人々が集まり出会う場であったと考えられる。そして恵比須信仰は、もともと漁民や海人の間に発したものと考えられる。農民の信仰する田の神が、定期の収穫を約束してくれる神であるのに対し、海で働く人々の幸は不定期であり、それを守護してくれる神は、海の彼方から来るものと信じたからであろう。漁村では、クジラ・サメ・イルカをはじめ海難者の漂流死体や海中から拾い上げた石など、絵じで海から寄り来るものを靈視し、それらを「エビス」と呼んで海の幸をもたらしてくれるものと信じている。このような恵比須信仰が、漁民の交換経済を通じて市に広まつた。

平安時代末期から鎌倉時代初めの市神エビスも、魚塙集散地に持ち込んだ漁民・海人の海の幸を呼び込もうとした祈願から祀られたものであろう。そしてそれが市を通じて商人、船主たちの信仰を集め、都市の町人、職人の間に普及してから農村にも及んだように思われる。そして都市では商業神、農村では農神としての性格を強めていったものと見られる。

広田神社（兵庫県西宮市）の西方の海辺にあつた末社であるから「西の宮」と呼ばれた「西宮のエビス社」が、恵比須信仰の本拠となるのは鎌倉時代中頃と思われる。しかし商業の發達とともに七福神の恵比須大黒が、各家々でも祀られるほど人気を博するに至ったのは、天文年間（一五三一～五五）をそぞろかのぼることはできないだろう。

二 恵比須講と十日夷

旧正月と十月の二十日を恵比須講といい、恵比

三 描かれた蛭子神

商家の恵比須講に使用された「蛭子神像」は、富裕な商家の多かった長浜町にも数多く残されている。ここでは長浜町ゆかりの作品を数点紹介しよう。

惠比須講を商人の行事として商売繁盛を祈り、親戚知己や出入りの者を招いて宴をはるところも多い。この日は錢を出すことを喜ばず、「升舟に家中の財布や有り金を入れて供えたりする。関東や東北地方などでは、生きたままのフナを水鉢に入れて供える風習があり、このフナはあとで戸戸の中に放してやる。

京阪神地方では、恵比須講の日を誓文払いとい

う。一年中商売のかけひきのため嘘をついた罪を

はらい、神罰をのがれる日だと伝えていた。これ

は、商家内の恵比須神前にての取引先との酒杯のとりかわしから始まつたものであろう。関西では

現在でも秋の売出しを誓文払いというが、このこ

とに因している。

また、余談だが、愛媛県吉田町では田楽を食べ

る日としている。男の子は夜になるとサザエの殻に穴をあけて幾十となく縄に通し、「今晚誓文払いおやじの口のはた味噌だらけ」と口々に

唱えて町中を引き回すという。

このような恵比須講は天文年間ごろから流行り、各家が夷大黒の神像や掛軸を祀ることから次第に盛んになり、江戸時代を通じて盛大に行われた。なお十日夷は、京阪神地方で正月十日に行われ

▲柴田義董の原画を模写した模本（左）から下絵（中）をつく
り、完成させた「紙本墨画淡彩蛭子神図」（中川雲屏）

致で描写している。通形の右手に竿を持ち、左脇に鯛を抱え、右足を踏み下げる岩上に坐す姿とは異なつて、かなり面白い。紙本墨画の小品ではあるが、製作年代のわかる作品として貴重である。

横山清暉（一七九三～一八六五）は、四条派松村景文の高弟で、のち四条派の塩川文麟、岸派の岸連山、円山派の中島来章とともに、平安四名家と称せられた。『本朝画人伝』でも、「京都画壇の大家」として記されている。元来は花鳥画が得意であるが、この蛭子神図もよく描けている。この像も通形の姿ではなく、鯛を両手で握つて竿に入れようとする姿を描写している。筆法は精銳で構図も良く、見所の多い作品であろう。

中川雲屏（一八〇二～一八六三）は、浅井郡曾根村（東浅井郡びわ町曾根）出身の絵師。最初長浜町の山縣岐鳳に師事し、のち京都に出て四条派の岡本豊彦に入学する。この蛭子神図は、普通の姿と大きく異なり、鯛を両手で持ち上げる独特のポーズをとる。これは、最近発見された雲屏の下絵類から、四条派の先輩柴田義董の原画によることが判明した。この義董の原画を模写した模本から下絵をつくり、下絵にあつた釣竿をはぶいて本画を完成させたのである。本画は紙本墨画の小品であるが、作画過程がわかる重要な作品である。

四 むすびにかえて

恵比須講の床飾りに使用された蛭子神図を三点紹介したが、いずれも長浜町ゆかりの商家から依頼されて制作されたものである。それは、長浜町の繁榮を見てきた証人であるといえるだろう。



「絹本著色蛭子神図」（横山清暉）